創造力、実践力。
国立大学法人
福井大学

［ふくだいプレス］

fukudai PRESS

学長特別座談会

福井大学が進める 高大接続と教育改革

学生広報スタッフ企画 We Love❤福大

福大生に聞いた!! あなたはどっち派!?

Vol. 28
2017
JANUARY

Interview

答えて！インタビュー

福大VOICE

今月のお題

○○○○○年のはじめは

新年を迎えて、今年はコレをする！という決意を教えてください。

（左から）医）医学科4年　木嶋優衣　木村依音　泉玲央

（左から）医）医学科4年　牧野成彦　松田航平　牧野紘幸

（左から）医）医学科4年　松田理砂　松吉光

（左から時計回りに）医）医学科4年　丸尾亮平　高橋基　木寺将大　小野真彩

（左から）工）電気・電子工学科3年　龍野悠真　宮川峻　本間凌哉

（左）工）生物応用化学科4年　吉原小百合
（右）工）生物応用化学科4年　島本美沙央

大学院工学研究科 生物応用化学専攻
博士前期課程1年　佐藤有史

（左から）教）学校教育課程1年　田中里奈　砂子綾音　明珍美佐　三好伽奈

［ふくだいプレス］
fukudai PRESS　Vol. 28 2017 JANUARY

CONTENTS

2 答えて！インタビュー
福大VOICE

4 学長特別座談会 **福井大学が進める 高大接続と教育改革**

12 学長メッセージ **新たな地平を切り拓く力を養おう**

13 Global IMAGINEERへの道をサポート
go go global!
交換留学生メッセージ

14 世界にイノベーションを
研究者紹介
教育学部｜山本博文 教授
医学部｜青木耕史 教授
工学部｜徳永雄次 教授
国際地域学部｜田中志敬 講師

18 福大のエースにクローズアップ！
FACE

20 部・サークルを紹介する
IT'S MY CIRCLE
文京｜SoSen部
松岡｜フットサルサークル

22 就活・進学応援情報
未来設計ノート
教職大学院 教職開発専攻
教職専門性開発コース2年 山田 晃大
修士課程 学校教育専攻
人文社会教育コース国語教育領域2年 岸名 孝明

24 学生広報スタッフが企画
We Love ❤ 福大
福大生に聞いた!! あなたはどっち派!?

26 卒業生から在学生の皆さんへ受け継がれる
学びのバトン
ジャパンポリマーク株式会社 山口裕也さん

27 **福井大学基金 寄附者ご芳名**

※掲載されている方の学年等は取材時のものです

表紙について

この日は、医学科4年生の"運動会"でした。といっても、走ったり、玉入れをするのではなく、総合診療における判断の早さと的確さをチーム毎に競うものです。講師はドクターGでおなじみの総合診療部・林寛之教授、患者役は研修医が務めます。林先生が血圧の低下や患者の呼吸の変化を指摘し、学生が症状の特徴を探り、救急処置を行います。患者の病状が読み取れない場面もあり、治療を選択するという難しさを学んでいました。

学長特別座談会

福井大学が進める 高大接続と教育改革

高校と大学が、教育の目的や内容、方法についてお互いに理解を深め、教育の連携を強く推進する「高大接続」が大きな課題となっています。高校と大学をうまくつなぎ、将来を担う若い世代を育むには、高校、大学の教育、さらには入学試験システムの一体的な改革が必要とされます。福井大学と高校の接続、連携はどのように進めればよいのでしょうか。教育改革の目指す姿を、眞弓光文学長と、高校長の経験を持つ堀康子学外理事、教育問題を専門に記者活動を続ける読売新聞東京本社の古沢由紀子論説委員に話し合ってもらいました。（司会進行：広報室長　本多宏）

眞弓　わが国は物的資源に乏しく、人こそが資源です。少子高齢化、過疎化が進む現状で、持続的に発展していくには、優れた教育により国民一人ひとりの能力を高め、生産性を向上させることが重要です。AIなどの進歩により20年後には職業が大きく変わると予測され、社会の劇的な変化にも対応できる人材、自ら考え、行動できる力を持った人材を育成する教育が求められており、大学はその中心的な役割を担うことが期待されています。しかし、大学だけで十分ではありません。高校と大学が、高大接続、連携を通して教育改革を担う必要があります。また、大学入試は、受験生の能力や意志を適切に判定することが大切であり、現行のあり方が最善とはかならずしも言えません。ここでも、高校と大学が連携して入試を改革していくことが重要です。

堀　高校側も教育を変えていく必要があります。福井では、高校の教員が福井大学の授業を見たり、大学から高校の授業を見に来ていただいたり、あるいは高校生が大学の授業に参加したりと、様々な歩み寄りを行っています。私自身は、勤務校の「スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）事業」で、福井大学や仁愛大学のお世話になっていました。高校生のうちから大学に行ける、大学の様子を見られるようになってきており、少しずつ動いている気がしますね。さらに劇的に動くことを期待しています。

古沢　文部科学省は「高大接続改革」という言葉を掲げていますが、一般の人にはなじみが薄いため新聞では使いがたく、これまでは「高校と大学の連携」と言い換えることが多かったのです。最近ようやく「高大接続」が定着してきたように思います。そんな中、福井大学は他大学に先駆けて教育委員会と連携したり、地域の高校と積極的に連携を深めたりしているので、先進的な取り組みには注目していました。

課題探求プロジェクトという教育改革

眞弓　学生にどのような力をつけさせるかという「ディプロマ・ポリシー（※1）」を大学と学部が社会に明示し、それに見合った教育を実施することが求められています。福井大学であれば、教育学部は教員、医学部は医師、看護師という資格を取得できる力を、工学部も「夢を形にできる工学能力」を、というディプロマ・ポリシーを持っており、それに合わせた教育を行っています。

今年度創設した国際地域学部で力を入れているのは、1年から4年まで段階的にレベルを上げていく長期間のPBL「課題探求プロジェクト」です。PBLとはProject Based Learning、自ら問題を明らかにし、解決策を考える力を身につけさせる教育です。価値観や考え方の異なる世界の人たちと

※1　ディプロマ・ポリシー　卒業認定・学位授与の方針：卒業までに学生が身に付けるべき資質・能力の明確化

共生していくためにはコミュニケーションが不可欠ですから、国際地域学部では、コミュニケーションツールである英語の能力をつけるわけですが、話す中身をしっかりと身につけられるように、アクティブラーニング中心の教育を実施しているのです。「文系学部は、卒業生がどんな力を身につけているのかよくわからない」と産業界から言われますが、これが福井大学としての一つの答えです。

堀　先日、課題探求プロジェクトの報告会を見せていただきました。おそらく地元出身の学生でも、入学するまで福井県の足元を見てこなかったと思うんですよ。このプロジェクトで県内の会社や自治体に足を運び、社員や職員の方から話を聞いて地元の企業や役所を知り、「これが課題です」とプレゼンテーションをした。ほかのグループはそれを一生懸命聞き、鋭い質問が飛んでいました。高校生や高校教員も参加し、協力した企業や自治体の方々も学生たちの発想に感心していました。地域に関心を持つのは大切で、いい試みだなと思いました。高校生たちも生き生きとして「私もぜひやりたい」「福井大学に入りたい」とあとで話していました。経験を重ねれば、さらに良くなっていくと思います。

古沢　「地域」を冠した学部が急速に増えています。福井大学もその先駆けですが、国際地域学部と聞くと、「あれ、国際と地域どっちなの？」「何をどう学ぶところなんだろう」と思う高校生や一般の人も多いでしょう。それだけに、学部のやっていることを高校生や企業に広く公開する場を設けたことは、非常に良かったですね。高校生であれば「福井大学を目指し、こういう勉強がしたい」というモチベーションにつながりますし、企業とは新しい出会い、新しいプロジェクトが生まれるかもしれません。地域に貢献する人材を育てるからこそ、国際的な視点や語学力、自分の考えをまとめて発信する力が必要なのだと改めて感じます。

ものを見る力を高校で身に付ける

眞弓　SSHに手を挙げた高校には、その活動に大学が関与する形で連携しています。さらに、大学が行う高いレベルの教育・研究を高校生に体験させる「グローバル・サイエンス・キャンパス」という取り組みで、生命科学分野を目指す高校生のモチベーションを高め、成長につなげていくことを目指しています。工学部では、理科や数学を教えている高校と大学の教員が互いの現場でともに学び合うことによって一貫教育に取り組む「高大連携数理研究会」の活動を7年前から続けています。

堀　藤島高校のSSH活動で一番問題となったのは、生徒たちには高校3年間に学んだことを有機的につなげて「ものを見る力」が備わっていないのでは、ということでした。「有機的につなげる力」を「教養」と考えていますが、知識が断片のまま卒業していくことを危惧したのです。藤島高校では文系、理系の別なくSSHに取り組んでいますが、ぜひとも読んでほしいテキストとして「近代とは何か～高校生のための基礎教養　第1集」という冊子を作ったんです。現代社会の基盤となる「近代」「科学」というキーワードのもとになる古典的な文献、さらには新しい本の記述、自分ではなかなか読まないだろうけれども、「ものを見る」きっかけを作る文章を読ませたい、そうすればスムーズに大学の勉強に入っていけるのではと考えて編集しました。生徒たちから「勉強することが非常に面白い、楽しいことだとわかった」と、うれしい感想をもらっています。大学入試はゴールではなく、勉強が楽しいからさらに上の学校に行って学び、社会の役に立つ人間になりたいと思ってほしい、そんな願いもこもっています。

眞弓　「教養」については、危機感を抱いています。学生の「本離れ」が進む状況のなか、簡単な知識はネットで調べることができます。しかし、思想性とまではいかなくても、教養として呼べるようなものを獲得する経験や学習がいまの時代、行われにくい。大学に入ってからでいいかというと、大学では、増え続ける専門知識に対応でき

堀　康子
ほり・やすこ
1953年生まれ。福井県出身
＜略歴＞
1976年4月　福井県教員採用
福井県立大野工業（現奥越明成高校）、丹南高校、武生東高校、藤島高校に教諭として勤務
2009年4月　福井県教育研究所教職研修課長
2011年4月　福井県立盲学校長
2012年4月　福井県立藤島高等学校長
2014年3月　定年退職
2016年4月　国立大学法人福井大学理事（非常勤）

眞弓 光文
まゆみ・みつふみ
1948年生まれ。三重県出身
専門　小児科学、アレルギー・リウマチ・免疫学
＜略歴＞
1989年3月　京都大学医学部小児科講師
1992年11月　京都大学医学部小児科助教授
1997年2月　福井医科大学小児科教授
2003年10月　福井大学医学部小児科教授（福井大学と福井医科大学の統合）
2004年4月　国立大学法人福井大学学長補佐（医療情報ネットワーク構想担当）
2007年4月　国立大学法人福井大学医学部長
2008年10月　国立大学法人福井大学理事・副学長
2013年4月　国立大学法人福井大学長

古沢 由紀子
ふるさわ・ゆきこ
1965年生まれ。新潟県出身
＜略歴＞
1987年4月　読売新聞東京本社入社
1987年4月　〃　山形支局
1993年4月　〃　東京本社編集局社会部（文部省・教育担当など）
2005年3月　〃　ロサンゼルス支局長
2009年6月　〃　東京本社編集局生活情報部次長
2012年4月　〃　東京本社編集委員
2013年4月　〃　東京本社編集局教育部次長
2015年4月　〃　東京本社編集局教育部長
2016年9月　〃　東京本社論説委員

るよう専門教育に軸足を置かざるを得ないところがあり、昔でいう教養教育をしっかり行う時間がとりにくいんですね。教養の形成は、高大接続でやるべき重要な部分ですね。

古沢　今の学生は、文理融合的な力を求められています。高校生の時、幅広く教養を身につけるというのは国際的に活躍するために必要です。理系に進む人でも、先人の思想を含めて歴史を知ることが大切だと思います。人文・社会科学的な知識が欠落しがちであるからこそ、文理融合の必要性が強く叫ばれているのではないでしょうか。高校時代に幅広い分野を学び、教養を身に付けることは素晴らしいと思います。

高大を接続する大学入試

眞弓　理系の人に、歴史、思想、文化など人文・社会科学の教養をいかに身につけさせるか。大学だけではカリキュラムが厳しく、やりにくい。高大接続の考え方でいえば、高校でそうした教育を受けて、入りたいと思う大学にちゃんと入れるような試験の仕組みが必要になってくると思います。

堀　大学入試について現場の先生たちに聞くと、いろんな意見が出ます。多くの先生が「総合的な力を見てほしい」と言われます。「大学入試で人物評価をする必要があるのか。不合格になれば人間性を否定されたのでは、と大きなショックを受ける。慎重にしてほしい」という声も出ています。「日本の社会は、失敗すると立ち直る機会、仕組みが乏しいので、失敗できる社会、何度でもトライできるような社会、大学であってほしい」という意見もありますね。

眞弓　高大接続入試と一口に言っても、どんな能力を評価するか、高校と大学がしっかり議論して深めないと難しい気がします。現状は入試改革ありきとなっていますね。「学力の3要素（※2）」の到達基準もあまり議論されていません。

堀　その点で、高校と大学の議論は必要ですね。「全国統一の試験は廃止し、各大学の個別試験を複数回実施したらどうか。企業なら6次試験までやるところもある。高校生を大学に呼んで入学予備軍を作ってインターン制度を充実させ、そこで生徒を見たらどうか」という意見もあります。共通しているのは「大学の情報をもっと高校に知らせてほしい」ということ。生徒の親御さんからも、大学の説明会に行きたいという声が出ています。もっと、大学とコミュニケーションをとろうということが共通しています。高校に勤めていた時、福井大学と福井県立大学の懇談会に参加しましたが、時間が限られ「話をした」という印象はあまり持っていないんですよ。学長さんともっと話す機会があったら良かったと思いますね。

県内外の優秀な高校生に入学してほしい

眞弓　福井県は進学希望者の数に比べ、受け皿となる大学の入学定員が少ないんですね。それで県、産業界から「県下の高校生を県内の大学に入れてほしい」という要望が寄せられます。若者の流出が続く福井の状況を考えると無理もないとは思いますが。しかし、他県の学生からも福井大学で勉強したいと思われる大学になっていかないと、人口が減っていくなかで大学は生き延びることができないと思います。

福井県の高校生に、「名古屋や金沢に行かなくても福井大学で勉強した方がもっと力がつく」と思われるような大学にするとともに、首都圏、中部圏、近畿圏から優秀な学生を受け入れ、福井県の発展に役立つ仕事に就いてもらうような枠組みを産学官の連携で作っていく取り組みをしていきたいと思います。

古沢　魅力ある大学となることで、結果として多方面から学生が来るということですね。

他県では国立大学と地域との交流が少ないケースもありますが、福井大学は国立大学でありながら、教育委員会と協力し、地元の産業界とも密に連携してきた歴史があり、さらに、県外からも優秀な学生を呼び込めれば理想的ですね。

眞弓　国際地域学部には岐阜県郡上市から来た学生がいますが、「国際地域学部で勉強して郡上市に帰り、地域に貢献したい」と言っています。郡上市は文化的にもすぐれた所ですが、福井大学の教育のあり方に関心をもって学び、ふるさとに帰って働きたいというのは一つの典型でしょう。こうした考えを持って、福井大学で学びたいと思う人が多くなれば、非常にありがたいと思いますね。

※2　学力の３要素　社会で自立して活動していくために必要な、主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度**「主体性・多様性・協働性」を養う**こと。
その基盤となる知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な**「思考力・判断力・表現力等の能力」を育む**こと。
さらにその基礎となる**「知識・技能」を習得**させること。
大学においては、それをさらに発展・向上させるとともに、これらを統合した学力を鍛錬することが必要。

古沢　卒業後、出身地に戻ったとしても、福井に還元するものがきっとあるでしょうね。福井の場合、業界に確固とした基盤があるのは恵まれているとも言えますね。むしろ逆に、働く場所がないので人材を育成しても地域で就職するのが難しい県が大半ではないでしょうか。小中学校の高い学力を高校、大学への進学、そして福井大学の高い就職率、低い離職率に結びつける一貫したサイクルが強みだと思いますよ。

福井を誇りに思うために

堀　小中高を通じて学力は高いのですが、問題は、「福井を誇りに思っていない子どもたち」が多いことです。それは、大人の姿が子どもに投影されているんだと思います。言葉の「なまりが恥ずかしい」とか、「特に誇れるものがない」と言う。「福井出身です」と言うと声が小さくなる（笑）。県外の大学に行っても「福井はいいところだから」と仲間を連れて帰ってくるような魅力を作らないといけないかなと思いますね。

　私が住んでいる越前市と岐阜県高山市は姉妹都市なんですが、高山には毎年多くの観光客が訪れます。一方、武生にも古い歴史があり、いい街なのですが、特に中心市街地は寂れています。例えば、テレビで観たのですが、高山市の小学1年生が誇りを持って獅子舞の練習をして伝統を継承している、そうした姿を見ると、地域に誇りを持つことの大切さを実感します。福井の子どもたちも地元に誇りを持てば、県外の大学に進学してもいつか戻ってくるし、県外からも人を呼び込めるんじゃないかと思いますね。このあたりが福井に欠けている大きなことじゃないでしょうか。

眞弓　福井は小さな県で巨大企業はないけれど、中小企業のなかにオンリーワン、ナンバーワンの技術をもった会社がたくさんあります。全国でも有効求人倍率が非常に高い。さらに、「幸福度ランキング1位」という評価もありますが、若い人から見た幸福度とは違うんですね。「幸福度ナンバーワンの県だから、若い人が帰ってくるはずだ」という考え方自体をそもそも改める必要がある。中小企業には良い面がたくさんありますが、若い人から見ると、大企業に比べて至らない面もある。女性の活躍にしても、大企業のような支援を全ての中小企業に求めるのは難しいのが現状です。所得も世帯当たり日本一、なのになぜ帰ってこないのか。大学の教育を改革すればいいというだけではないと思います。

古沢　高校や大学の責任というよりも、社会全体として地域の魅力を子どもに伝えてこなかった面が大きいと思いますね。最近、地域の課題について高校で学習を深めようという動きが全国的に活発です。受験対策に力を入れ、大都市の有名大学に生徒を送り込むことを至上命題としてきた進学校でも、地域の課題を学ぶことによって地元に貢献する人材を育てようという機運が高まっています。都市部に進学して卒業後に戻ってこなくても何らかの形で貢献する人材を育てられればいいという考え方のようです。

　SSHならぬSCH、スーパー・コミュニティ・ハイスクールと銘打ち、岐阜県の高校教師らが呼びかけて、草の根のネットワークをつくっています。地域を見直し、地元に残りたいという生徒はかなりいると思うので、そうした学生が学ぶ場や、意欲を持って働ける場を用意していくことは重要だと思います。

堀　福井の小中学校でも取り組みが始まっていますよ。「福井の食」として、越前がにを上手に食べる方法を教室で学ぶ。鯖江市の小学校では、伝統の越前漆器を給食の食器に使っています。課題探求プロジェクトで工房を訪れた国際地域学部の学生も「初めて知った」と言っていましたよね。

眞弓　自分が生まれた地域に誇りを持ち、かつ地域を活性化していきたいと思うことが地方創生につながるわけですが、大学はその思いを持ち、それを実現できる力を持った人材を育成する。ただ、そうした人材が地域に残ってくれるかとなると別の話で、学校だけでなく、産学官金民からなる地域の全ての人たちが一丸となって取り組まないと、簡単には実現しないと思います。

「考力」「働力」「創力」
―福井大学の入試改革

古沢　「高大接続を入試だけの話にしないで下さい」と文科省はよく言いますが、入試は非常に重要で、大きなメッセージになると思います。福井大学の高大接続入試には、大変関心があります。どんな入試をするかということで、その大学がどんな教育をして、何を目指すかが伝わると思います。

眞弓　大学入試では、知識以外に思考力、判断力、表現力、知識を活用する力、さらに勇気や倫理観、リーダーシップといった人間性をきちんと評価して合否を決定すべし、という意見があります。高校と大学がもっと話をして、上からの改革ありきではなく、下から積み上げていくような改革が必要ではないか。福井大学がやろうとしている入試改革の取り組みに、高校での学びの現場で、「問題発見力」「調整力」「計画力」「目標設定力」からなる『考力』、「自己表現力」「傾聴力」「発信力」「先見力」からなる『働力』、さらに、「実行力」「独創力」「修正力」からなる『創力』を縦軸に、それぞれの「力」の到達レベルを横軸とするルーブリックで判定しようという試みがあります。この判定と、入学した学生の成長にどの程度相関があるのかを調べ、この方式が本当によいのかどうか判断しようというものです。三重大学、静岡大学と共同で進めています。しかし、これには時間がかかり、1年や2年で結論は出ません。

司会　個別選抜に反映させるという考え方でよいのでしょうか。

眞弓　そうです。ただし、大学側が総体として共通の指標を提示できないと、高校の現場に混乱をもたらすだけだと思います。5段階評価の内申書に正直なことを書くと、保護者からクレームが出ることもあるようですが、生徒たちの能力をいかに客観的に評価するのか。一方で、高校側は1人でも多くの生徒を希望大学に合格させてやりたいわけですから、評価の客観性に疑問符が付くこともあると聞き及びます。高校のきちんとした評価が大学入試の情報として入る仕組みをいかに作っていくか。難しい問題ですが、入試システムのあり方について、多くの人を巻き込んだオープンな議論が必要です。

古沢　読売新聞教育部の連載をまとめた「大学入試改革」という本を2016年7月に出版しました。アメリカ、韓国、台湾の大学入試を取材したのですが、韓国の大学ではAO入試の担当官が手厚く配置され、常に高校を回っているんですね。日本よりも高校と大学の連携が密で、推薦なども信頼関係を持ってやりとりしているようでした。非常に手間はかかりますが。台湾では、各生徒の学びの記録である「ポートフォリオ」のデジタル化を検討しているということでした。「高校でどんな学びをしてきたか丁寧に見てもらいたい」という現場の意向もあるようです。高校の成績が上位の生徒は大学に入っても上位になるという傾向があると各国の先生方がおっしゃっていました。

　ペーパーテストだけでは、予備校が充実していない地方の高校はどうしても不利になってしまうので、台湾大学などでは、地方の高校から優先して推薦を受け入れる「繁星（はんせい）推薦」という枠を設けています。アメリカでも同様に地方の高校や貧困層に配慮する仕組みがあります。

司会　国際地域学部も、新たなAO入試に取り組んでいます。

眞弓　はい。今は若干名ですが、まさに高大接続入試で、高校からの多くの情報を重視して受験生の能力を判断します。この学部では、大学入試センター試験を課さなくても、この方法で適切な入試が行えると期待しています。基礎学力をきちっと見ることは大事ですが、問題はその見方をどうするか。センター試験で見るのか、大学独自の試験で見るのか。本来は高校の学びの現場できちっと見られれば良いのでしょうが、それを入学試験の一環としてやってしまうと、高校生の負担になってしまうという問題も起きてくる。

堀　現況の入試の場合、大多数の高校生がセンター試験を受けるので、「センターは課してほしい」というのが現場の先生の声ですね。基礎学力は大事にしたいですから、高校できちっと学んでほしい。基礎学力とは、私は言語能力だと思っています。日本語、英語だけではなく、数学的な力も言語能力の一つだと考えています。長文を読み、その意味を理解できるかどうかが人間とAIの違いらしいですが、そうした能力は身につけてほしいと思います。日本国民が身につけてきた「読み・書き・そろばん」の力が基礎にあって、学長が言われた「考力」「創力」は生まれて

くる。無からは何も生まれません。

古沢　入試改革について、高校、大学の現場には根強い抵抗がありますし、上からの改革には、さらなる反発を生む可能性もあります。ただ、入試のあり方が現状のままでいいかとなると、やはり変えていく必要はあるのではないでしょうか。1点刻みのペーパーテストで合否が決まる面も残っているので、多面的、総合的な選抜に転換していくという改革は進めていかなければいけないと思いますね。

眞弓　「1点刻みの入試は不適切」という意見、それはある意味正しいと思います。一方で、1点刻みにしなければ、大学に課せられた「入学定員管理」が困難です。残念ながら、一定の学力を身につけていたら受験生全員を入学させるというわけにはいかないのです。

古沢　評価の問題は確かに難しいですが、理想的には、一定の学力があるかを見た上で、思考力や表現力を問う多面的な選抜の枠を増やしていくべきだと思います。いま少しずつ広がっているのはお茶の水女子大などで始まったセミナー型入試です。図書館の本を自由に使って調べた上でリポートをまとめたり、討論や発表をしたりする方式です。秋田の国際教養大学なども似た取り組みをしています。そうした入試の枠を設けることも有意義だと思いますね。多岐にわたる力を見ることができると聞いています。

眞弓　東大、京大でもごく限られた部分で、新たなAO入試を導入しようという動きがあります。一方で、大学は社会から入学試験の公正性を求められる。合否の理由をきちっと説明できる試験を実施しないといけない。限定的な人数であれば、社会も容認してくれると思いますが。ならば、アメリカと同じように、入学を許可するに足る一定以上の学力のある生徒は定員を超えても入学させ、1～2年後に、勉学について来られない生徒には退学を促す。この方法も、定員管理が厳しい現状では不可能ですが、同時に、進級できない、あるいは退学となる学生が別の大学に移れるシステムを社会全体で構築する必要がある。

古沢　確かに、日本の大学には流動性がないので、海外とは同列には論じられない面がありますね。ただ、1点刻みのペーパーテストで選抜するのが真に公平かというと、格差が拡大する社会では、そうではないかもしれない。今の入試方式が大学にとって良いかというと、長期的には必ずしもそうではないとも思います。1点差を競う試験対策に重点を置くと、高校教育でも、生徒の本当の力を伸ばすことはできないのではないでしょうか。

堀　現在の高校はセンター試験の結果を予備校に送り、データをもらって「○○大学なら受かる、△△大学なら難しい」と決めている状況です。どうしてこんなことをしなければいけないのか、と常に思っていました。受験産業の協力なしにできないわけですから。

3つのポリシー（※3）

眞弓　偏差値で格付けされている現状を打開するためにも、全ての大学が明確なアドミッション・ポリシー、すなわちどんな学生に入学してほしいのか、そのためにどんな試験で選別するかを打ち出す必要があると思っています。本学のアドミッション・ポリシーには、医学部も教育学部も「学力の3要素」が入っています。問題は、それがしっかりと見えるような入学試験をしているか、ということなんです。医学部では面接試験に力を入れていますが、教員のマンパワーの関係でどうしても限界がある。全国の大学はどこでも同じだと思います。「なぜ医学部を受験しましたか」と面接で問うと、多くの受験生が「私を育ててくれた大好きなおばあちゃんが病気で、うんぬん」と答えるんですね（笑）。明らかに予備校が準備したセリフなんです（笑）。ですから1回や2回の面接で見極めるのは難しい。厳しく言えば、現状の面接は「この人は医療者になるのは明らかに不適格」と思える人を落とすだけのものにしかなり得ていないかもしれません。逆に、医者の適性はなくても、素晴らしい医学研究者になる可能性のある人を落としているかもしれない。

古沢　どういう人を大学から送り出すかというディプロマ・ポリシーにおいては、成績管理や、きちんと勉強させる仕組みが当然重要です。学生には厳しいかもしれませんが、その点については企業からの要請も多いと聞いています。定員管理は4年間で卒業するのが前提になっているわけで

SSH事業の一環で福井県立藤島高等学校が平成27年度に作成した教材「近代とは何か」。このテキストは平成28年11月に東京書籍北陸支社から出版、市販もしている。「学び方について」「近代とは何か」「現代の世界と日本」「科学とは何か」の4章で構成。

※3　3つのポリシー　**ディプロマ・ポリシー**（卒業認定・学位授与の方針：卒業までに学生が身に付けるべき資質・能力の明確化）
カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針：体系的で組織的な教育活動の展開のための教育課程編成、教育内容・方法、学修成果の評価方法の明確化）
アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針：入学者に求める学力の明確化、具体的な入学者選抜方法の明示）

すが、もう少し流動性を持たせたり、出口を厳しくしていけば、入試が持つ意味も変わってくるかもしれませんね。

福井大学は、米国アイビーリーグのブラウン大学の教育学習センター長を招聘し、教育について様々な助言を受け、改革につなげています。私たちも、その経緯を取材し、本でも紹介したのですが、授業の取り方を変えたり、学年ごとの取得単位を制限したりされていますね。

眞弓　1、2年次に単位を山ほどとれるようなカリキュラムと単位認定をして、その結果、3年次からは就職活動しかしないというケースがある。それではダメだと思うんです。それで、各年度で取れる単位の制限を設けています。「本当の力をつけるために、一つ一つの単位をしっかり勉強して下さい。単位の認定は厳しくやりますよ」という、まあ当たり前のことですが。国際地域学部に関しては、CAP制を導入し、判定基準も単に秀・優・良・可・不可ではなく、アメリカ式の13段階評価のGPA制度を導入する改革を進めています。

教育の質の保証という点で、大学はこの20年、30年ですごく良くなりました。ただ、社会に対する発信力がまだまだ足りない。大学のことを論じる方の中には、自分が大学を卒業した時代の印象のままで論じる人が多いですね。

堀　確かに大学は成績管理も厳しくなったし、良くなったということは高校の先生からも聞きますね。

眞弓　大学生は総じて勉強するようになりましたよ。

堀　その一方、バイトしないとやっていけないといったように経済的に困窮している学生も多いと聞きますね。私たちの時代に比べ、学費がすごく上がりましたからね。

古沢　国の給付型奨学金がようやく導入されますが、最近は、アルバイトに追われて学業を途中で断念する学生もいると聞きます。

眞弓　大学を出たら、いい給料をもらえるんだから、自分で大学の学費を払うのは当然という、いわゆる受益者負担の考え方で、大学の授業料が国立大も含めてどんどん上がって、現在に至っている。

大学を出た人は失業者になる割合が低く、国は失業保険を払うことが少ない。クリエイティブな仕事に就くことで給料をたくさん稼ぎ、税金として還元もされる。このように、大学で学ぶことは学生個人の利益にもなるけれど、社会の利益にもなるという考え方で対応している国も多くありますね。人こそが資源である日本は、ひとりでも多くの国民に高等教育を受けてもらい、その人の力を高める必要があります。学ぶ意欲の強い学生にバイトばかりさせてはいけない。しっかりと学んで大学を卒業できるような仕組みをもっと充実させないといけない。これも大学の教育改革の一つだと思うんですね。

高校はどのように変わるのか

堀　私の高校時代は、誰も塾に行っていませんでした。いまは塾に行っている高校生が本当に多い。塾に行かなくても自分で勉強できないといけないと思うんです。塾に行っている人から言わせると、「大学入試対応のためだ」ということなので、入試は変わらないといけないと思います。

私が大学を受けたころは、いまほど文理分けが早くなく、専門的でもなかったので、高校2年まで文理同じ学習内容で、3年生だけ違ったんですね。私も数Ⅲまでやりました。

先日、大学の同窓会があったんですが、文学部の同級生に医師がいました。文学部を卒業した後、考えが変わって医学部に入り直したんですね。

そういうふうに人生の選択の幅がいまより広いというか、やり直しが利く時代だった。いまの高校生は、狭いところに入れられているという反省があります。高校の教育はもっと自由でないといけないとも思います。

いまの高校生はすごく勉強しているように見えるんですが、高校の教科書は30年前より簡単になっています。私が高校生のころ、1年の時には「徒然草」をほとんど1冊読み、2年では「枕草子」を読みました。いまは両方とも部分的にしか読みません。国語だけかと思っ

たら、ほかの教科も同じだとおっしゃる。基礎的な学力という意味でも、日本の知的な部分、バックボーンになるようなものが育たない教育だという気がします。哲学まで持てないとしても、大事なものをもっと体系的に学習できるといい。そのためにどうしたらよいかと考えた時、一つのアンサーがこのテキスト「近代とは何か」だったんですね。SSH事業で生徒は良い体験をしたと思います。だけど、知識が有機的につながっていなかった。

眞弓　今後、AIが人間の代わりをしてくれることになれば、「じゃ、人間がすべきことって何なのか？」という議論が高まる。AIで代用できるような知識、能力しか持ち合わせていない人間ばかりになったら大変なことです。スマホに「30割る6」と言ったら「5」と答えてくれる時代に、人間が分数の計算をどれだけ早くできるかに、意味があるのか。なぜ「5」になるかわかる、そんな力が必要だと思います。

堀　語学だって、スマホが翻訳機になります。けれど、言葉が話せないと人間同士の本当のコミュニケーションは生まれないと思います。

眞弓　そんな時代に人は何を学ぶべきか。

堀　ここでも高大接続、高校と大学の学習がつながる形がいいと思うんですね。私は大学に入った時、勉強法を学ぶのに2年以上かかりました。後で聞くと、医学部に進んだ人はそれほど苦労しなかったというんですね。覚えなければならないこと、やらないといけないことがたくさんあって忙しく、学問の方法について悩む時間がなかったというのです。私の場合、時間はあったけれど課題研究のような勉強の仕方をしていなかったので、高校と大学の学びがはっきり切れていて、戸惑いました。

司会　高校でもいまはアクティブラーニング的な取り組みをしていますね。

堀　いまはしています。でも昔はそれが欠けていました。昔の良かった部分と、いまの良い部分は違うんですが。

眞弓　医学部に入ろうと思うと、暗記する勉強も必要です。しかし大学に入って医学の勉強が始まり、記憶できない量の知識がどんときた時に、どうやって勉強したらよいかわからなくなる。何が必要な知識で、何があまり必要でないのか選択できないんですね。そうした学生は、高校時代には全部覚えていた、それでよかったんですよ。でも、大学ではとても全部は覚えきれない。

古沢　判断力のもととなるような幅広い知識がないと、視野が狭くなってしまいます。

眞弓　「捨てていい知識」と「捨ててはいけない知識」を自分で見極める能力がない。教科書1ページを全部暗記しようとする。考えるということができていないんです。

古沢　最近の入試では、講義を聴かせて、どの程度内容を理解したかを評価し、関連する知識や考え方もみる方式を取り入れる大学が出てきています。講義を聴いて「ノートを取る力」を見る大学もあるほどです。確かに、要点を聞き取ってまとめることができないと、社会に出てからも苦労すると思います。自分で判断して情報を取捨選択することが苦手な人が増えているということでしょう。

　必要とされる知識量が本当に増えているので、学びのあり方も変わっていくと思います。

　自分でテーマを決めてリポートを書いたり発表をしたりする課題研究に取り組んでいる高校生と、こうした経験のない高校生の差はかなりあると思いますね。選挙権年齢が18歳以上に引き下げられるのを前に、高校生と先生を対象にしたセミナーを読売新聞社主催で開催しました。討論を聞いていると、普段、課題研究をしたりアクティブラーニング的な指導を受けたりしている生徒たちは、自分で思考する習慣がついていることが見て取れます。自分で考えるためには、社会に対する幅広い関心や知識を持つことが必要で、課題研究や討論によって培われる面があると思います。

思いやりを感性として身に付ける

眞弓　教育改革、入試改革、高大連携、高大接続のすべてにおいて、子どもたちの力をいかに伸ばすかという視点で語られています。それは決して間違いではないし、大学はそうした力を持った人たちを養成しないといけない。でも同時に、それが行き過ぎて「能力がある者は大学に行って、偉くなるのは当然」という社会になってしまうと、社会の分断というリスクが生じる。弱者に対する思いやりを教育という形だけではなく、感性として身につけさせる取り組みも同時にやらないといけないと思います。

堀　そのためには18歳だけでなく、リタイアした大人も入るとか、大学がいろんな世代の交流の場になればいいのかなと思います。

古沢　福井には相当のブランド力があると思います。産業の力、小中学生の高い学力という特性を生かして、福井大学にはこれまで以上に先駆的な取り組みを期待しています。たとえば県内の高校と地道に連携し、受験対策に偏らない学習で生徒の学力を伸ばす。さらに、その学力を見極めて良い生徒を入学させることが、福井ならできるのではないかと思うのです。

　これは大学入試の理想型ですが、その最短距離にいるのが福井大学ではないかと。お世辞ではなく、様々な改革を大学が一丸となって非常にスピーディーに進めているという印象がありますし、ぜひ草の根からの入試改革、教育改革を実現していただきたいと思います。

学長メッセージ

新たな地平を切り拓く力を養おう

学長 眞弓 光文

我が国の持続的な発展は皆さんの双肩にかかっています

我が国が直面している少子高齢化への対応の重要性が語られて久しい。生産年齢人口は急激に減少し続けている。その一方、65歳以上の人口は今後30年以上増加を続ける。さらに、国と地方をあわせて1000兆円を超える「借金」があり、この額は増加し続けている。この状況で、どうすれば今後も社会を維持・発展させていくことができるのか？　この状況は我が国が今まで経験したことがなく、歴史にその答えを求めることはできない。現実は、有効な対策が実施されないまま、首都圏への一極集中も相まって、地方は過疎化、高齢化が進み、ますます衰退している。

一方、地球全体を見れば、人口増加やエネルギー消費量の増加などによる食糧不足、資源枯渇、温暖化や、経済格差の拡大、貧困などの問題が深刻さを増している。世界一の大国アメリカは、これまで、資本主義と自由競争を基盤とし、努力すれば豊かになるチャンスが得られるという「アメリカンドリーム」を掲げて、多くの移民を受け入れ、発展を続けてきた。しかし近年、少数の富裕層への富の偏在と、それに伴う中間層の低所得化が進み、少数の富裕層と多数の低所得層という、二極化が進んだ。アメリカ第一主義や不法移民排斥を掲げるトランプ氏が大統領に選出されたのは、このような現状に対する白人低所得者層を中心とする国民の不満の表れと言われる。他の先進国でも内向きの流れ、排他主義、右傾化が強まっており、世界がこれからどこに向かうのか、予断を許さない。

激動の時代が静かに始まっている。AIの進歩により、人が就く職業もやがて大きく変わる。日本の人口は減少し続け、このままの状況で推移すれば、50年後には今の約60%にまで減少する。その後も人口減少は進み、多くの地域共同体が消滅する。学生の皆さんはまさにこの激動の時代を生きる。我が国が、そして世界が、これからも持続的に発展しうるかどうかは、まさに皆さんの双肩にかかっている。皆さんは、問題を直視し、福井大学でしっかり学び、新たな地平を切り拓くことができる力を養い、社会の持続的な発展と世界の平和に貢献してほしい。

go go global!

go go globalでは、毎回学生の皆さんが目指す
「Global IMAGINEER」への道をサポートする情報をお届けします。
今回は福井大学と東亜大学校（韓国）の交換留学生の活動を紹介します。

福井大学では、現在24ヵ国・200名の
外国人留学生が学んでいます！

Welcome to UNIVERSITY OF FUKUI

2016年10月、全大陸からの留学生が福井大学に入学しました。

2016年後期外国人留学生オリエンテーションウェルカムパーティにて

アメリカ	4人	タイ	3人	台湾	2人	バングラデシュ	1人
インドネシア	4人	中国	40人	ドイツ	2人	ブータン	2人
オーストラリア	1人	マカオ	1人	ナイジェリア	1人	フランス	1人
コロンビア	1人	香港	2人	ハンガリー	1人	ポルトガル	1人

交換

福井大学 ↓
↑ 東亜大学校

留学

>> 福島さんからKIMさんへ >>

釜山と違って時間がゆったりと流れる福井はどうですか？私は釜山に来てせっかちになった気がします…。釜山は雪がほとんど降らないので、この冬は福井でスキーやスノーボードなどに挑戦してみて下さい！また、雪が積もった永平寺はとても綺麗なのでおすすめです！

教育学研究科
教科教育専攻2年
福島亜矢子さん

高校の頃から韓国語習得のために1年程度留学してみたいと考えていたのですが、タイミングが合わず、「もう留学は難しいかな…」と正直諦めていました。そんな折、同期が留学することになったり、福井大学の交換留学先に韓国の大学がいくつかあることを知り、留学したいという気持ちに再度火が付き、「留学するなら学生の今しかない！」と、交換留学をすることに決めました。私は韓国語の習得を第一の留学目的としているので、大学付属の語学堂での授業が中心の毎日です。語学堂には世界各地から学生が集まっているので、韓国だけでなく、様々な国の文化に触れることができ、視野が広がります。また、交換留学では、学部の授業を受けることができます。私も後期は自分の専攻である声楽の授業を履修しました。授業は全て韓国語で行われるため、実技の向上に加え、語学力の向上に繋がったと感じています。

<< KIMさんから福島さんへ <<

東亜大学校には東南アジアを始めとする国々からたくさんの留学生が来ているので、交流を深めてください。韓国は日本より交通費が安いので、いろんなところに出かけてください。ちなみにチョンナムのピビンバ、観光ならキョンブク地区の歴史街道がオススメです。

中学3年生のときに日本のアニメに興味を持ったことがきっかけで、日本語の勉強を始めました。東亜大学校の日本への留学プログラムの多くは文系学部しかありませんでしたが、福井大学だけは工学部に交換留学ができることがわかり、選びました。授業では漢字が難しくて、先生の板書になかなか追いつけませんでしたが、今ではそれもスムーズにできるようになりました。福井大学で韓国出身は私一人ですが、友達がいろいろ助けてくれ、地理もわかり、ショッピングセンターやいろいろな福井の観光名所を自転車でめぐるのが楽しいです。残りの数ヵ月は九州などに旅行してみたいと思います。

工）機械工学科3年
KIM HYUNJAEさん

海外渡航者の皆さんへ

留学や旅行等で外国に行く際には、危険情報の把握や緊急時の安否確認のため、必ず出発前に右記の手続きを行ってください。

1 外務省の海外安全情報の確認

2 「海外渡航届」の提出
→学生サービス課／松岡キャンパス学務室へ

3 ○日本国のパスポートを持つ方
3カ月未満の渡航 外務省海外旅行登録「たびレジ」
3カ月以上の渡航 「在留届」の提出

○日本国以外のパスポートを持つ方
「一時出国及び再入国届」の提出 → 国際課（文京・松岡キャンパス）

「地質」の今から未来を知る

山本 博文 教授（地質学）
Hirofumi Yamamoto

活断層の動きを探る

大学に入学し、専門として選んだのが「地球科学」という分野でした。研究室にこもるというのが性に合わず、野外へ出たいという思いがあったからでした。大学を出た後は、地質調査所（現在の産総研）という国の研究機関で7年弱、海域の地質の研究に携わってきました。主な調査フィールドは日本海沿岸で、有人潜水調査船「しんかい2000」での潜水調査や南極海の調査にも関わってきました。

その後、縁あって福井大学に赴任しました。たまたま福井沖の海域は私の主たる調査フィールドでしたので、海の地質から陸の地質を眺めてみようと思い立ちました。海から見ると、越前海岸の不思議な成り立ちが目につきました。越前海岸沖の海域は海の調査からは明らかに沈降しているのに、越前海岸は隆起しているのです。まずはこの海岸の隆起について調べ、海域との違いとその原因を明らかにしたいと思いました。

越前海岸の調査によって、数百年前と3000年前に数mに及ぶ隆起があり、こういった隆起が繰り返されて、今の急峻な越前海岸が形成されたことがわかってきました。ちょうどこの頃、阪神淡路大震災が発生し、全国的に活断層調査が行われることとなりました。調査していた越前海岸の隆起も活断層によるものと考えられ、私もこの調査に携わることとなりました。以降、県内で幾つもの活断層の調査・研究を進めてきました。

また豪雨災害、津波災害も地質学が関係する重要なテーマであり、2004年の福井豪雨の際には、発生直後から被災地の調査に入りました。2011年の東北地方の津波災害では、数回にわたり現地に調査に入り、この成果を基に、福井県沿岸部での津波堆積物調査も行ってきています。

東北地方の津波被災地に立って

研究の外を見ることも大切

福井県の地質を考える上で、県外や海外の地質を見ることも大切だと思っています。その場所の特徴は、狭い範囲だけを見ていては気付かないのです。特に思い出深いのが、10年ほど前に行った、アメリカでの活断層や地質の調査です。日本という島国とは全く異なる大陸の地質は、研究の上で大変刺激になるものでした。

学校防災に役立てる

2011年の津波災害は、防災教育の重要な転換点になったと思います。特に学校現場で自然災害に対し、どう取り組んでいったらいいのか、多くの示唆に富む事例がありました。自然災害に関し、学校現場に、さらには社会にどう伝え、被害の軽減に貢献したらいいのか、これからの課題だと考えています。

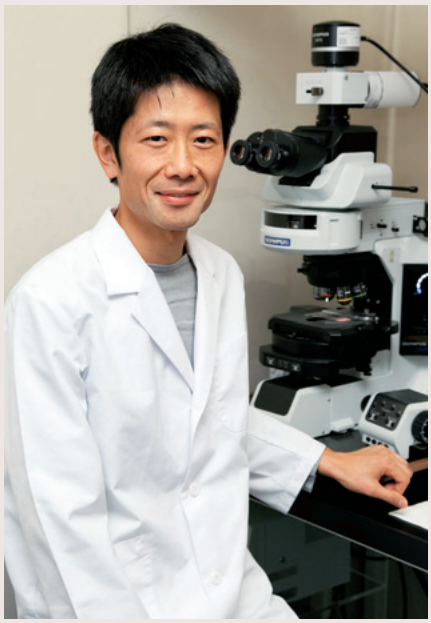
米国アリゾナ州のグランドキャニオン

今ハマっていること★

一番困った質問です、いろいろあって。写真に自転車、釣りに……。でも時間が取れなくて。パソコンの壁紙には、そんな思いが込められた写真が並んでいます。

釣った魚ではありませんが

生命力の源には目に見えない分子のはたらきがある



青木 耕史 教授（薬理学）
Koji Aoki

病はどこからくるのか

大学入学当時に出合った「病気と正常は表裏一体※」という言葉に感銘を受けました。体内では、多くの組織で細胞がたえず新しく生産されて恒常性を維持していますが、その正常な仕組みが働かないと、がんのような深刻な病を引き起こします。このように、正常な細胞と表裏一体の関係にあるがん細胞の増殖についてもっと知りたくて、がんの発症メカニズムを追及している研究室に飛び込みました。

腸に固有の分子の機能を探る

ヒトの小腸や大腸では、その形態形成や生理機能を司るタンパク質として「CDX1」と「CDX2」と呼ばれるホメオボックス転写因子が働いています。この働きを発生過程で抑制すると、腸に発生すべき組織が食道になります。すなわち、腸が腸として機能するためには、「CDX1」と「CDX2」が不可欠です。

それらの機能を理解するために、大腸癌細胞で「CDX1／CDX2」が働いたときの遺伝子発現状態を網羅的に解析しました。その結果、「CDX1／CDX2」は、がん細胞の根源である「がん幹細胞」をやっつけることで、大腸癌の発生や悪性化の進展を抑えている可能性を見出しました。多くの実験から、その仮説を支持する結果も得られています。

また、「CDX1／CDX2」のタンパク質間の相互作用に注目して研究を進めたところ、飢餓状態におかれた細胞が自分自身の一部を栄養として食べる仕組み「オートファジー（自食作用）」に欠かせない酵素「ATG7」に結合することが分かりました。「CDX1／CDX2」がATG7に結合すると、オートファジーの作用で腸内環境が健康に保たれます。しかし、この機能が破たんすると、腸の粘膜に炎症がおこり、下痢や血便が続く難病「クローン病」になるのではないか、と仮説をたてて検証をすすめています。

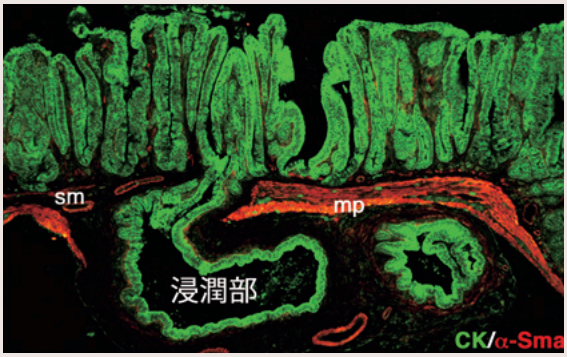
「CDX1」と「CDX2」の2つのタンパク質が持つ特異的な機能を明らかにし、大腸癌やクローン病を治療するための分子標的薬の開発を目指しています。

CDX2などの転写因子の活性を測定するルミノメーター

創造性を育む

基礎研究の楽しさは、生命現象の背後に隠れている、いまだ見えていないメカニズムを創造することで仮説をつくり、実験で検証することにあります。どんな教科書にも載っていないオリジナルの仮説を証明できたときの感動は大きな達成感につながります。学生の皆さんにも、見えていることに捉われずに、見えないことにこそ重きをおいて、また、自力で考えることにより新たな道を切り開いて欲しいと思います。

※クロード・ベルナール著「実験医学序説」

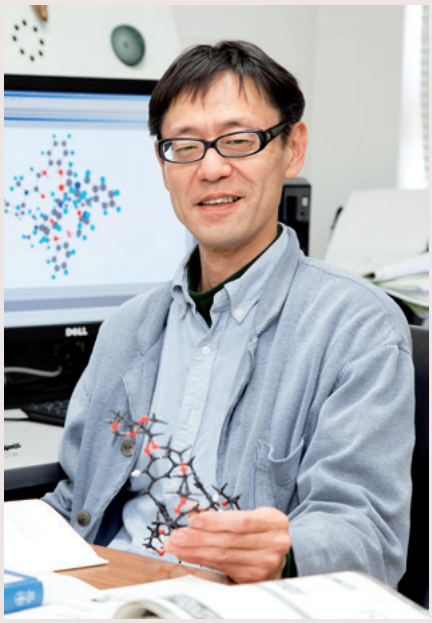


マウスの腸にできた腫瘍細胞（緑色）が悪性化し、底部に向かって浸潤している様子（sm：粘膜下層、mp：筋層）

今ハマっていること★

ランニングです。1年間で6000㎞、気が付くとマイカーの走行距離より走っていました…。

自動で動く超小さい分子マシン

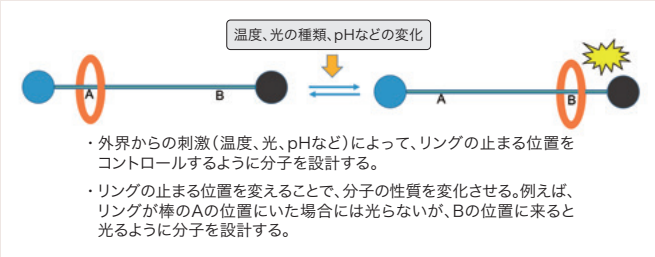


徳永 雄次 教授（有機化学）
Yuji Tokunaga

普通の分子がスーパーに

2016年10月5日、スウェーデン王立科学アカデミーはノーベル化学賞を「世界でもっとも小さいマシンを作った人物に」と発表しました。自動車、洗濯機、電子レンジなど自動制御のマシンはたくさん発明されていますが、ナノスケール（ナノは十億分の一）の世界に自動マシンを作る科学者がいるのです。

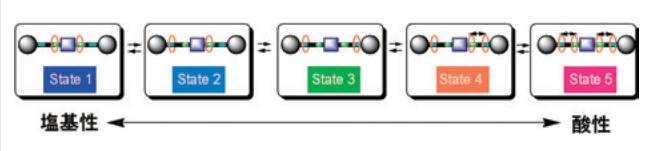
今回受賞したのは、分子で回転モーター、車輪、モノレールなどの分子機械（モレキュラーマシン）を作った科学者でした。そのうちフランスのジャン・ピエール・ソバージュ教授と米国のフレーザー・ストッダート教授の研究対象が、棒状の分子とリング状の分子が結合し、リングが軸から抜けない構造を持った「ロタキサン」（図1）と呼ばれる分子機械です。リングが棒の上をスライドすることによって、外界からの刺激でリングの止まる位置をON／OFFで切り換えることにより、ソバージュ教授らは人工筋肉の合成に成功し、またストッダート教授はコンピューターに使われている2進法の「0-1応答」の実現に成功しました。



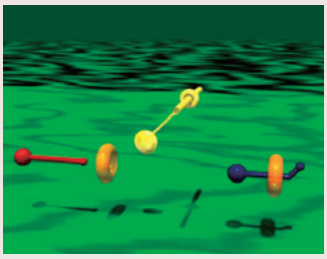
（図1）ロタキサン分子スイッチ

私もこのロタキサンの基礎研究をしています。

0、1の動きだけではなく、リングを「0、1、2、3、4」の5段階で動かすことができないかと考え（図2）、酸性からアルカリ性までのpHの変化を刺激に、さらには、紫外線の吸収率を調節することで目指す5通りの動きを実現し、その動きを簡単に観測する方法を見出しました。また、光や圧力によってロタキサンが形成する機構を明らかにしました（図3）。こうしたロタキサンの構造は、DNAを合成する際にも利用されており、構造や機能をデザインすることで生命科学の分野でも新しい可能性を拓くことができるかもしれません。



（図2）リングを5段階で動かす



（図3）ロタキサンが形成する機構

超分子への挑戦

このような分子機械の研究は1つの分子の機能だけではなく、分子が持つ特性を生かしながら本来の分子を超える機能を獲得した「スーパーモレキュール（超分子）」と呼ばれる分子構造を形成する領域です。

新たに思い描いている研究は「分子ソーイング」を使った〝縫物〟です。人が針を持って波線縫いをする動きを分子で試みています。ある特異な水素結合や金属結合で制御しながら、分子が波線縫いのような動きで、超薄な〝繊維〟をナノの世界で自動的に生産できたら驚きですよね。

超分子の世界は何らかの新たな機能を作り出すだけでなく、分子の結合を制御することで見たこともないような美しい幾何学的な立体構造も作り出せます。すぐに何かの役に立たなくても、これまでにないものを作る研究はとても面白い世界ですよ。

今ハマっていること★

昭和の匂いのする映画やテレビを見ること。世の中の移り変わりの速さについていけないせいなのですかね。

まちづくりの持続可能性を考える

田中 志敬 講師（地域社会学）
Yukitaka Tanaka

地域の中に溶け込む研究

大学時代、中学生による殺傷事件など世間を賑わせる少年犯罪が多かったことに関心を持ち、少年犯罪をテーマにした卒業論文を作成し、その中で少年犯罪の防止には、「地域のコミュニティで見守る」「家族で見守る」といったソーシャルサポートが大切だと結論づけました。今思うとそれが「地域のあり方」を考えるターニングポイントでした。

大学院に進学してからは、「参与観察」という手法を用い、実際に研究対象とする地域に住んだり通ったりし、社会の一員としてコミュニティを直接観察し、聞き取りなどを行いました。そうすることで、地域のコミュニティが持つ力にひかれ、まちの構造や社会関係、人間関係を研究対象とする地域社会学の道に進むことを決めました。

祇園祭の「八幡山」の前で

10年来関わっている地域に、祇園祭の後祭りで巡行する山鉾のひとつ「八幡山」で知られる京都市中京区の三条町があります。都市の中でも少子高齢化が進んでいた地域で、お山を守っているのは地元の一部の住民でした。その一方で、地区内には新しいマンションが建ち、新しい住民が増えています。この界隈は建築時のトラブルからマンションの建築反対運動が起きたところもあります。祭を守るためにはそういった経緯も乗り越えて、お互いに連携しなければならないという矛盾を抱えます。新住民が土地の文化や風習に共感しながら旧住民とどのように良好な関係を結んでいくのかを探っています。

「まちこわし」にならないように

まちづくりには初動期、実践期、成熟期があり、その中で地域の担い手や支え手が実際にどうコーディネートしているのかをもっと細かく調べて体系化・パターン化したいですね。今まで見てきた経験からいうと、大学が関わりすぎたまちづくりは研究室が引き揚げた後にうまくいかなくなり、「まちづくり」どころか、「まちこわし」になってしまいます。そうならないように、あくまでも主導は地域住民で、学生はきっかけをつくる〝刺激〟、教員は専門性の高い助言を〝置き土産〟にするといった関わり方で、まちづくりや持続可能な地域のあり方について研究を進めています。

理論と実践のバランスを

専門的な理論を学んでフィールドに入っても、その理論が全く通じないことがままありますが、それがある意味面白いと感じています。現場でどういうことが起きているのかを見聞きしていくと、まちづくりが進まない理由が、実は人間関係のちょっとしたこじれだったりします。そういう事例を積み上げていくことはフィールドワーカーの醍醐味です。複雑に入り組んだ事例に深く入りこむほどに戸惑いは増しますけれど、刺激がたくさんあります。

学生の皆さんも、学内外のいろんな人と接点を持ち、自分の経験知を広げ、その経験をさらに分析して自分に足りないものを補いながら、専門性を高めてほしいと思います。

平泉寺フィールドワークに向けた福井県内の若者とのワークショップ

今ハマっていること★

家族でキャンプに行くこと。3人の息子たちが今年キャンプデビューしました。リズムの森や、県内のいろんなところに行って楽しんでいます。

教育学部　「ふくいのお地蔵さんを探そうプロジェクト」の成果報告

（左から）
教育地域科学部（※）
地域科学課程4年
高間 みどりさん
有定 佑さん
笹原 知也さん

「博物館実習」の授業を履修する有定さん、笹原さん、高間さんの3人が、昨年の5月中旬から8月下旬にかけて行った福井市内のお地蔵さんの分布状況調査の成果を、福井市立郷土歴史博物館の特別展「福井の仏像」で披露しました。

例年、博物館実習生は特別展の開催に向け、テーマに沿った資料を集めパネル作りをしています。3人は、学芸員のアドバイスで、道端に置かれたお地蔵さんの分布状況がこれまで調査されていない点に着目し、フィールドワークに挑戦しました。

お地蔵さんの素材となる笏谷石（しゃくだにいし）の石切場だった足羽山周辺や、悪霊や疫病を防ぐ「道祖神」としての役割から街道沿いに多いという情報を手がかりに調査を開始。市内の道を1つずつ自転車で走り、お地蔵さんの場所やいわれ、設置年などを確認して回りました。

調査後しばらくして、大願寺のコンビニ駐車場内に置かれていたお地蔵さんは自動車事故で壊れてしまいました。このように突然失われることを考えると、文化財として保護や調査記録の保存の意義を改めて実感したとのこと。特別展の来場者からは、30カ所以上のお地蔵さん情報も寄せられており、笹原さんは「今回の調査で調べきれなかった箇所を補い、より形あるものになるよう引き継いでいきたい」と語ってくれました。

なお、今回の調査内容は報告書にまとめ、「福井大学教育地域科学部博物館学集報」に掲載される予定です。

3人のイチオシ地蔵。カエルにも愛されています（福井市南楢原町。京福バス「楢原」停留所横の公園内）

※教育地域科学部は平成28年度に教育学部、国際地域学部に改組しましたが、平成27年以前に入学した学生は、現在も旧学部に所属しています。

CE 福大のエースにクローズアップ！

医学部　奏でる力で音楽の素晴らしさを伝えたい“Orchestra”を結成

医学部医学科2年
近藤 諒さん

4歳から始めたバイオリンをきっかけに、クラシック音楽を身近に感じてもらおうと、オーケストラの活動を始めました。

幼少からクラシック音楽に触れていても敷居が高いと感じていた近藤さん。愛知県の高校に通っていた時に、様々な人たちにクラシック音楽をもっと気軽に楽しんでもらえる機会を作りたいと考え、大学の合格が決まった翌日からオーケストラ結成に向けて動き始めました。声を掛けた音楽仲間10人から始まり、賛同の輪は35人に広がり、指揮者のいないオーケストラ「TOKAI Friends Chamber Orchestra」を2015年に結成しました。東海地区に関わりのある高校1年生から30代の社会人まで、音楽を愛するメンバーが集まっています。普段は北海道から徳島まで全国に散らばっている団員ですが、年1回開催する公演に向けて集まっています。

通常のオーケストラは、指揮者が演奏をコントロールしますが、あえて指揮者をおかずに結成したのは、奏者同士が自分たちの音やハーモニーを追求し、高めあっていく、そんな演奏を目指したいと考えたから。公演では、定番のモーツァルトやバッハだけでなく、親しみのある映画 ジブリ作品の音楽も演奏し、クラシック音楽を少しでも身近に感じてもらえるよう選曲しています。

発起人の近藤さんは「愛知県だけでなく、お世話になっている福井はもちろん、全国的に公演できたら」と話し、「今後はオーケストラだけでなく、ソロや三重奏などの小編成で病院や老人ホームを慰問し、音楽の力で心の豊かさや癒しなど、少しでも助けになるような活動ができればと考えています」と、活動の場が全国へと広がりつつあります。

第1回演奏会での挨拶

工学部 「東京国際プロジェクションマッピングアワード」優秀賞を受賞

有志グループ mei

キャンパスイルミネーションを手掛けてきた学生たちが、光や灯りの可能性をもっと自由に表現し、大学だけでなく地域の方々に身近に灯りを感じてもらえるような活動をしようと、照明の明（めい）をとって「mei」と名付けたグループを結成しました。キャンパスを飛び出して、市の施設やビアガーデンなどでプロジェクションマッピングを展開しています。

結成から3年目を迎えた2016年に、プロジェクションマッピングの全国大会に出場することを決め、「東京国際プロジェクションマッピングアワード」に作品を応募したところ、一次審査を通過し、26団体のうち17団体が最終審査に残りました。12月17日（土）に東京ビッグサイトで審査が行われ、約4000人の観客の前でビッグサイトの壁面にプロジェクションマッピングを上映しました。

プロジェクションマッピングの難しさは、単なる映像の上映ではなく、建物の形状を生かした動画づくりにあります。逆三角形のような特殊な形をしたビッグサイトの壁面を立体的に捉え、「.（ドット）」から始まり、さまざまな線や模様に変化する「Installation Time」という作品に仕上げました。

代表の黒﨑展兆さんは「映像や芸術を専門とする強豪ぞろいの中での上映は非常に緊張しました。建築を学んでいる私たちだからわかる建物の特徴を生かした映像が評価されて嬉しい」と話し、さらなる今後の活動が期待されています。来月2月28日（火）まで「たけふ冬のイルミネーション2016 ／蔵の辻ライトアップ」にも参加します。

ビッグサイト壁面に映したプロジェクションマッピング

Fukudai A

工学部 プレゼンスキルを磨き、明確に伝える

（左から）
工学部
情報・メディア工学科4年
種田和弘さん
機械工学科3年
日下部杏さん
機械工学科2年
平田将大さん

競技用のレーシングカーの総合力を競う「全日本学生フォーミュラカー大会」に、本学の有志チーム「FRC（フォーミュラカー製作プロジェクト）」が出場しています。この大会は、フォーミュラカーの性能やタイムアタックのほかに、マシンのビジネスモデルを発表するプレゼンテーションも審査の対象に入っています。2016年はこのプレゼンテーションで、106チームのうち12位という好成績を収めました。このプレゼンテーションの発表をしたのが、種田さん、日下部さん、平田さんです。

今年製作したマシンのテーマは、神経をゾクゾクさせて魂を刺激する「Soul beat formula」。このコンセプトに合わせて作ったマシンについて、どのような戦略で拡散し、一般市場でのユーザーを獲得するかをプレゼンテーションしました。

市場調査から、アマチュアのレーサーを対象にクラウドファンディングでの購入や、グループレンタルなどのビジネスモデルを企画しました。実現性を高めるためには、販売台数を明確にする必要があり、県内外にあるサーキットの利用者や福井商工会議所の方々からアンケートやアドバイスをもらいました。

参加した日下部さんは「世界的に有名なプレゼンテーション番組『TED』を見ながら、話し方やストーリーの見せ方などを学びました。来年は後輩に引き継いでぜひトップ5入りを達成したいです」と意気込みを見せていました。

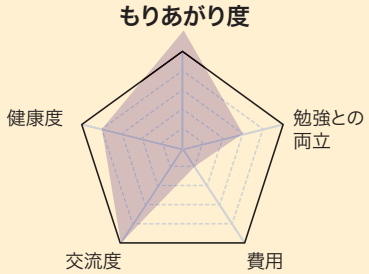
プレゼンテーションの様子

学内には体育系・文化系あわせて120近くの部・サークルがあり、福大生の半数以上が所属しています。
超有名な!? サークルから意外と知られていないサークルまで、さまざまな部・サークルをご紹介!

●『IT'S MY CIRCLE』に登場したいサークルのみなさんは広報室までご連絡ください。E-mail:sskoho-k@ad.u-fukui.ac.jp

文京 SoSen部

キャンパスライフを
一緒に盛り上げよう!



［代 表 者］田中幹也
［活 動 日］金曜日
［練習場所］生協食堂など
［部 員 数］43名(男性33名:女性10名)
［ハイシーズン］7月・2月・3月

ホームページ
※なし

生協と学生の架け橋になり、Smileを引き出す

発足54年を迎える福井大学生活協同組合の学生部門です。この「SoSen部」という名前はもともとの「組織宣伝部」をスタイリッシュに略した名称です。大学生活に欠かせない購買や食堂店舗をより使いやすくなるような活動、大学生活を有意義にする環境活動、国際活動などを企画しています。また、大学の年間行事に沿ってオープンキャンパスの企画や新入生を歓迎・サポートするキャンペーン・イベントなども実施しています。

最近企画したのは毎年12月上旬に開催している「福大健康祭」。大学の保健管理センターの看護師さんに協力を得ながら、アルコールパッチテストやストレスチェック、肌チェックなどたくさんのブースを食堂テラスで開催。崩れがちな食生活などの見直しを呼びかけ、勉強、アルバイトで溜まったストレスがないかを振り返ってもらいました。他にも大学生活に役立つ「暮らしの豆知識」として福井ならではの冬の過ごし方、大学生活が楽しくなるワンポイントを機関誌「KYODO」やフライヤー「かわら版」などで面白く、愉快に紹介しています。

もうすぐ入学してくる新入生にとって大学生活は不安が多いもの。そこで一人暮らしのコツや大学生活、講義などについてまとめた冊子「新学期版KYODO」、いざというときに役立つ「病院マップ」、他の新入生や先輩と楽しく自炊用の料理を学べる「料理教室」、楽しくゲームをしながら友達作りができる「新入生の集い」などを企画中です。

活動の醍醐味は「やりがい」。福大生が充実した大学生活を送るための企画を日々考えています。「楽しい企画が盛りだくさんなので一緒にキャンパスライフを満喫しよう!」と元気であったかいメンバーばかりです。

※SoSen部は大学の部・サークルには所属していませんが、学生団体です。

福大健康祭「アルコールパッチテスト」

打ち合わせも和気あいあい

部員募集中!

福井大学で楽しい企画を
考えたい人、集まれ!

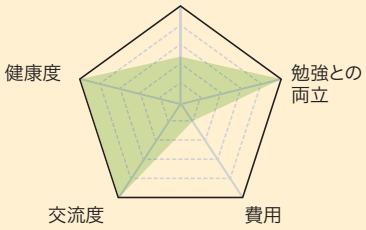
部長 田中幹也さん

IT'S MY CIRCLE

現在の登録数
［文京］体育系44／文化系33
［松岡］体育系22／文化系21

松岡 フットサルサークル

わずか5年で
100人超の大所帯に！



［代 表 者］新澤　克
［活 動 日］水曜日
［練習場所］永平寺町
松岡B＆G海洋センターなど
［部 員 数］125名（男性92名：女性33名）
［ハイシーズン］4～6月
ホームページ
https://twitter.com/fukuimedfutsal

男女混合の「ミックス」を楽しもう!!

「フットサル」というスポーツを知っていますか？手は使わず、足でボールを蹴って敵のゴールにボールを入れて得点を競う。ここまではサッカーと同じですが、フットサルはサッカーのように見えて全然違うところがツボです。

「使用するボールは一回り小さく弾みにくいローバウンド用」「試合時間は約半分の20分ハーフ」「人数は半分以下の1チーム5人制」「コートの広さはサッカーで使用する面積の9分の1程度」とコンパクト。足元のテクニックがより求められ、短くつないだパス回しで攻め合いますが、スライディングは禁止、オフサイドがないなど、ルールにもいくつか違いがあります。一番の魅力は、男女混合の「ミックス」スタイルでもプレーができること。性別や年齢に関係なく、気軽に楽しめるスポーツです。

学年・男女問わずフットサルで広く交流がしたい！と創部したのは5年前。今もその思いは引き継がれ、友達が友達を呼び、今では部員数125名の大所帯になりました。練習の参加者は20人程度ですが、毎回顔ぶれが変わるので、色々な部員と交流を深めることができます。

ミックスの試合形式で練習を行い、男女とも経験者が揃った時には激しくプレーすることもありますが、ほとんどが初心者なので、その時は優しい部内ルールが適用されます。初心者には、積極的にパスを出し、3回ボールに触れるまでは他のプレーヤーは見守らなければいけない「3タッチルール」や、男子が女子に強いボールを当ててしまったときは、猛烈抗議を受けて平謝りなんてルール！？も。初参加でも一緒にプレーして汗を流せばすぐに打ち解け、コミュニケーションツールとしても楽しんでいます。

他大学からの入部もあり、ますます賑やかムードの私たちとフットサルを通じて交流の輪を広げてみませんか？他大学や社会人チームの皆さん、試合の申し込みお待ちしています！経験者から未経験者まで性別問わず、いつでも部員募集中です！！

白熱した試合を展開中！

自然満喫BBQ。楽しい仲間にカンパーイ！！

部員募集中！

学部、大学、男女問わず！！
ゆるーくお待ちしてます。

部長 新澤 克さん

進学編

未来設計ノート

MIRAI SEKKEI NOTE

就職か進学か、迷っている人も多いでしょう。どのように進路を決めたのか、先輩のアドバイスに耳を傾けてみませんか。今回は大学院進学の魅力について、大学院教育学研究科2年の山田晃大さんと岸名孝明さんにお話を聞きました。

修士課程 学校教育専攻
人文社会教育コース
国語教育領域2年
岸名 孝明 さん

教科の専門力を高め 多様な指導方法を学ぶ

教科（国語）の理解をさらに深めたかったので、教科専門科目の授業が始まった学部の2年次には大学院への進学を決めていました。近年、社会の急速な変化や教育改革などに伴い、教師に求められる役割が複雑化・多様化してきていることも理由の一つです。教員採用試験には学部生のときに合格していたので、修士課程では余裕をもって学問に邁進することができました。

教科についての本質的な理解がなければ、授業を組み立てることはもちろん、生徒やグループに生じている困難を読み取り、適切に介入することもできません。教科を掘り下げることにより、これらの課題に対し、さまざまなアプローチから解決を図ることができるようになります。指導の面では、教育学・心理学・社会学などの関係諸学問を学ぶことに加え、教育現場に出向いて授業を参観し、現職の先生や大学教員、県の指導主事の先生とともに、意見交換しながら多角的に授業を研究します。国語科では現場での実習よりも、多くの授業を客観的に分析することを重視していますが、他教科では授業実践がカリキュラムに組み込まれている場合もあります。こうして多様な指導方法を学ぶことで、引き出しが増えたと感じています。

大学院は、教科教育の専門性を高めるには最適の環境です。学部の4年間では学べなかったことをみっちり勉強でき、高校のような専門性の高い現場に出てもしっかり教えられるという自信につながりました。

教職大学院 教職開発専攻
教職専門性開発コース2年
山田 晃大 さん

学校現場に身を置き 実践を通して学ぶ

教員志望ではありましたが、学問としての数学を深く学んでから教員になろうと思い、信州大学理学部数理・自然情報科学科（現在の数学科）に進学しました。福井大学教職大学院への進学を決めたのは、教育実習で大切に感じた子どもの主体性を尊重する指導について、実践の積み重ねを通して学んでいけると感じたからです。

福井大学教職大学院では、学校現場での実践を積み重ねる長期インターンシップと、他の院生とともに学び合う各種カンファレンスを通して、学んでいきます。インターンシップ先での先生方の取り組みや自らの授業実践、生徒の反応に対するとらえを、カンファレンスでの学びや振り返りから深めていけます。指導方法や教科の理解、生徒理解などについて、実践を通して学び、次の実践につなげていけることが教職大学院の魅力です。

また教職大学院では、多くの現職の先生方も学んでいらっしゃいます。実践から得た学びの意味や良さなどについて、現場経験の豊かな先生方に支えられながら学んでいけたことは、教員採用試験にも役立ちました。

数学から学べることを一方的に教えるのではなく、生徒の様子や学校・社会の状況を踏まえた双方向型の指導で教えられるようになってきました。これは教職大学院で身につけることができた、学び続ける姿勢のおかげです。

石井バークマン先生の 大学院進学のすすめ

教育学研究科長
石井バークマン麻子先生

教育の研究と実践力は院でこそ深まります

学部の卒業研究等で取り組んだ課題をさらに深く研究したい人、教師としての十分な専門性を身につけてから学校現場で働きたい人、地域の中の学校を研究してみたい人。そんな人は、大学院進学を選択肢の一つとして、考えてみませんか。

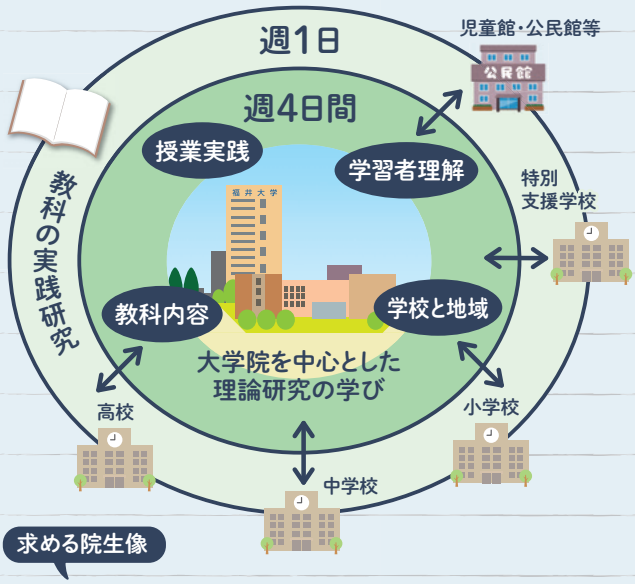
学校教育専攻では自分の研究したいテーマを科学的に深め、探究し、修士論文にまとめます。社会人院生や留学生との共同活動、大学院教員との協働プロジェクト等を通して、皆さんの世界が広がっていくことでしょう。教職開発専攻では学校での教育実践を中心に、同世代のみならず多様な年代の現職教員との学び合いの場が数多くダイナミックに用意されています。

教育学研究科　教育のプロフェッショナルになる 2つの 専攻

学校教育専攻

- ☑ 教科・領域の専門性を深める
- ☑ 授業実践力と分析力を高める
- ☑ 課題探求力を身につける

学校教育専攻の学び方のイメージ



求める院生像

- ○「教えること」「学ぶこと」をじっくりと科学的に探究する人
- ○ 地域と学校の課題解決に強い関心のある人

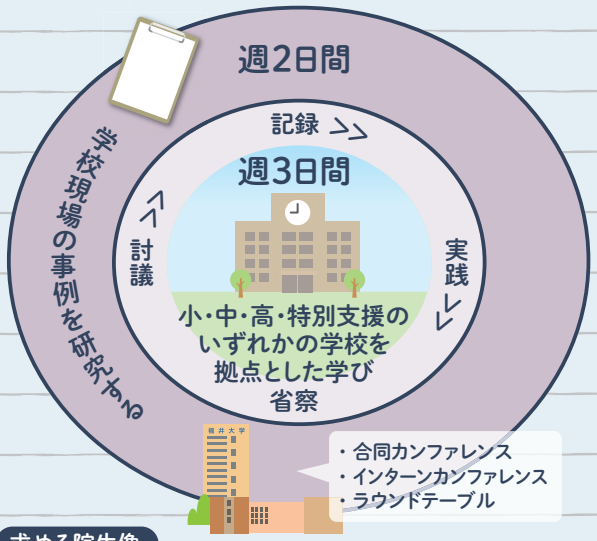
修士課程
学校教育専攻（入学定員30名）

- ・小学校教育コース
- ・人文社会教育コース
- ・理数・生活教育コース
- ・芸術・スポーツ教育コース

教職開発専攻（教職大学院）

- ☑ 授業実践から学ぶ
- ☑ 長期インターンシップ
- ☑ 教科、学校、世代を超えた学び合い

教職開発専攻の学び方のイメージ



求める院生像

- ○ 新しい環境になじみやすく、チャレンジ精神と行動力のある人
- ○ 教師の仕事の総体を実践的に学びたい人

教職大学院
教職開発専攻（入学定員37名）

- ・教職専門性開発コース
- ※ ミドルリーダー養成コース
- ※ 学校改革マネジメントコース

※ 現職教員のコース

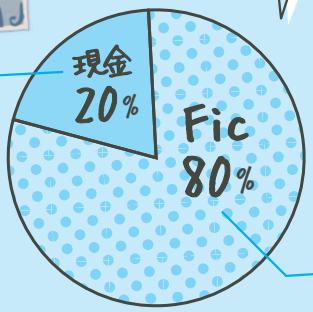
福大生に聞いた!!

あなたはどっち派!?

すべての学部100人に学生広報スタッフがアンケート! 意外と気になる福大生の生活を調査しました。

We Love 福大

生協での支払いは!?



- カードを探さなくていい
- チャージされてない心配もない
- 現金専用の列もある

- ピッで簡単!
- チャージしてないと後ろの人に迷惑
- 財布いらずで軽い!

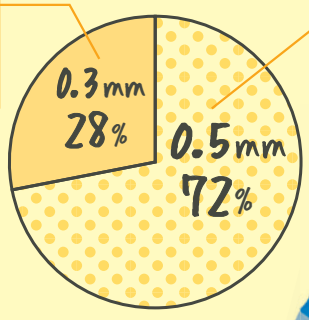
大学生活で何気なく目にしているものを調査してみると、おもしろい結果に! すべて多数派だったあなたは王道中の王道を行く人! 逆にすべて少数派だったあなたは、福大の中でも貴重な存在☆です! さあ、あなたはどっち派!? わくわく♥

医)看護学科4年
船本 彩花

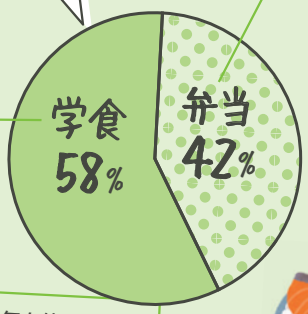
シャー芯は!?

- 折れやすい
- 細かく書ける
- 製図用シャーペンは書き味が違う!

- 折れにくい!
- シャーペンの種類が多い



ランチは!?



- 女子力・男子力の見せ場!
- お金が安くすむ
- 朝の時間をとられる
- 購買で買う人も多い!

- 栄養に気を使った食事
- フェアが楽しめる
- 混雑時は大変

学生広報スタッフがブログを随時更新中。ぜひ見てね！また、学生広報スタッフを募集しています。興味のある方はホームページまで。

ブログ「うらら@ふくだい」

今までありがとうございました！

祝 卒業！先輩広報スタッフにインタビュー

学生広報スタッフと取材や会議を重ねながら作ったこのWe love福大のページが好評だった時はとても嬉しかったです。広報活動が大好きです！

医）看護学科4年
船本 彩花

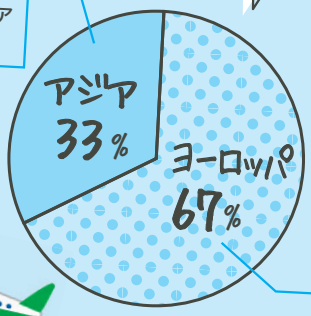
一つ一つの取材が楽しかったですし、社会に旅立つ前の良い経験になりました。支えてくれた職員の方やメンバーのみなさんに感謝！

工学研究科知能システム工学専攻博士前期課程2年
杉浦 拓己

みんなで苦労して作り上げたものがたくさんの人に見てもらえるのは何とも言い難い喜びがありました。6年間ありがとうございました！

工学研究科
繊維・先端工学専攻
博士前期課程2年
牧田 恵実

旅行に行くなら!?

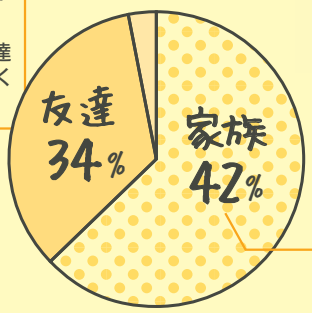


- 比較的安価で行きやすい
- ボランティアで行きたい

- やっぱり憧れ！！
- 国が集まってるから何カ国も行ける！

初詣に一緒に行くなら!?

その他と答えた人は4人！



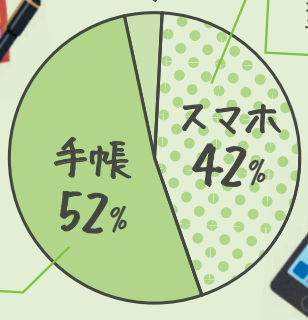
- 宗教上行かない
- 家族・友達両方と行くよ！

- 友達と行く人は意外と多い！
- ちなみに学生広報スタッフは家族と行く人が多いよ

意外な結果がいっぱい！スケジュール管理はスマホでもやりやすいことにびっくり！旅行に行くならアジアがよかったけど、ヨーロッパにも足をのばして行ってみたいなぁ〜。

教）地域科学課程2年
齊藤 実希

スケジュール管理は!?



- 空いた時間に手軽に見られる
- お知らせ通知が来るから大事な予定も忘れない！

- お気に入りのデザインや機能など、自分に合ったものが見つかる！

卒業生から在学生の皆さんへ受け継がれる
学びのバトン
UNIVERSITY OF FUKUI

大学院でのトライ&エラーが研究者としての土台に

ジャパンポリマーク株式会社
技術開発部係長
山口 裕也（やまぐち ひろや）さん

2004年
大学院工学研究科　ファイバー・アメニティ工学専攻修士課程修了
（現：繊維先端工学専攻 博士前期課程）

熱転写技術の奥深さにやりがいを感じる

大学院を修了後、金属加工の会社に3年間勤め、その後、ジャパンポリマークに転職し、9年目を迎えました。「熱転写」という技術を使って、ユニフォームや衣服に背番号やロゴを接着する会社です。熱転写とは、通常のプリント技術と違い、フィルムに印刷された絵柄に特殊な接着剤を載せ、熱と圧力で衣服に接着させる技術です。

ラベルの接着性、堅牢度、コストパフォーマンスを追求する技術開発は奥が深く、やりがいを感じています。サッカーの日本代表やなでしこジャパンの背番号は当社の技術によるもので、リオ五輪の日本選手団が着ていたユニフォームのロゴも当社で接着したものです。世界の大舞台で自分たちが手掛けたものをみると、とても誇らしいですね。

果てしなく広がる技術開発のフィールド

もともと数学と理科が好きでしたが、大学院で化学の面白さに目覚め、研究者、技術者として生きることを決めました。

前職の務め先は金属を熱加工する企業でしたので、当社との出会いはこれまでの経験も生きるのではないかと運命を感じました。当時はあまり知られていない技術でしたが、ラベルを永久接着できる技術は凄いものだと感じ、研究を深めていけばイノベーターになれると思いました。

学生の頃、「繊維の時代は終わった」というイメージを持っていましたが、今も撥水性や伸縮性など生地の素材は日々進化しています。ラベルの熱転写技術もその進化に追走していかなければならないので、研究、技術開発は新たな挑戦の連続です。最近では、ウィンドブレーカーが雨で濡れた際に雨水が手に沿って流れないように熱転写ラベルに溝を設計するなど、応用技術も手掛け、研究テーマは尽きることがありません。

繊維、アパレル、自動車などの会社とコラボレーションして研究を進め、海外市場への進出も多くなっており、技術開発のフィールドは果てしなく広がっています。

いろいろなことに興味を持ちチャレンジしてほしい

新たな問題や課題について、福井大学の恩師に相談できるのはとてもありがたいですね。参考になる論文を教えていただき、助けられたことが何度もあります。大学の試験機器を使わせていただき、「こんな分析をしたらいいのではないか」とアドバイスをもらったこともあります。

社会人はまず結果を求められますが、大学院時代は失敗を気にせず実験に取り組むことができました。失敗から得るものも多く、トライ&エラーを繰り返した母校での経験が研究者としての土台になっています。

福大生のみなさんにも、いろいろなことに興味を持ってチャレンジしてほしいですね。すぐに成果は出なくても、今やっていることは決して無駄にはなりません。将来、どこかできっと役に立ちます。

繊維への接着具合を確認

福井大学基金

学生の皆さんへの修学支援のため、福井大学基金へ多くのご厚意が寄せられています。ご支援に対し、心より御礼申し上げます。

今号では、平成28年9月10日から12月7日までの寄附報告
及びご寄附くださいました個人・法人・団体様で
掲載をご了承いただいた方のご芳名（50音順）を
掲載させていただきます。
今後とも福井大学基金へより一層のご支援を賜りますよう、
よろしくお願い申し上げます。

福井大学基金の寄附状況 （平成28年12月7日現在）　寄附申込数 1,908件（延べ数）／寄附申込額 1億2,776万6,023円

個人

伊佐　公男　様
井上　暁子　様
宇佐美守英　様
織田　賢祐　様
小竹　正夫　様
金森　憲一　様
菊池　孝明　様
岸野　麻衣　様
木戸市右衛門　様
河野　陽子　様
小杉真一郎　様
小林　喬郎　様
近藤　康博　様
坂井　忠勝　様
鈴木　富也　様
須藤　正克　様
城　尚子　様
成實　明夫　様
西脇　壽郎　様
長谷川弘光　様
堀　康子　様
堀内　英子　様
牧野　浩一　様
松浦　知史　様
松木　健一　様
眞弓　光文　様
宮澤　晴久　様
宮下　哲　様
森國　健次　様
山内　高弘　様
山田　哲弘　様
吉波　尚美　様
ほか 匿名希望の方 7名

法人・団体

株式会社 アートテクノロジー 様
株式会社曙学院　様
株式会社アタゴ　様
株式会社永和 システムマネジメント 様
株式会社エクスタイル 様
株式会社 オーディオテクニカフクイ 様
株式会社柿本商会　様
酒井化学工業株式会社 様
サカセ化学工業株式会社 様
株式会社武田機械　様
敦賀セメント株式会社 様
株式会社 天晴データネット 様
東洋染工株式会社　様
永森建設株式会社　様
日華化学株式会社　様
株式会社ミツヤ　様
株式会社ミルコン　様

福井大学基金の詳細については、
福井大学HPをご覧ください。
http://www.u-fukui.ac.jp/kikin/

福井大学基金についてのお問い合わせ先
福井大学基金事務室　〒910-8507 福井県福井市文京3丁目9-1
TEL 0776-27-9903（ダイヤルイン）　FAX 0776-27-8518　E-mail　kikin@ad.u-fukui.ac.jp

fukudai PRESS［ふくだいプレス］ 第28号 発行日／平成29年1月 発行者／福井大学広報センター TEL：0776-27-9733 E-mail：sskoho-k@ad.u-fukui.ac.jp

4月号の特集は

次号特集に掲載するサークル・学生団体を募集します！

サークル！サークル！サークル！＋学生団体

次号4月発刊のふくだいプレスは、新入生歓迎号として「サークル！サークル！サークル！＋学生団体」を特集。文京キャンパス、松岡キャンパスの部活・サークル・学生団体をご紹介！新入生に大アピールしたい部・サークル・団体からのご応募をお待ちしています。

新入生勧誘の絶好のチャンス！

サークルPR大作戦！

直接、広報室に来ていただくか、sskoho-k@ad.u-fukui.ac.jpまで。部・サークル・団体名、代表者氏名、連絡先、PRポイントを明記の上、お送りください。※応募者多数の場合は抽選とします。

学務部からのお知らせ

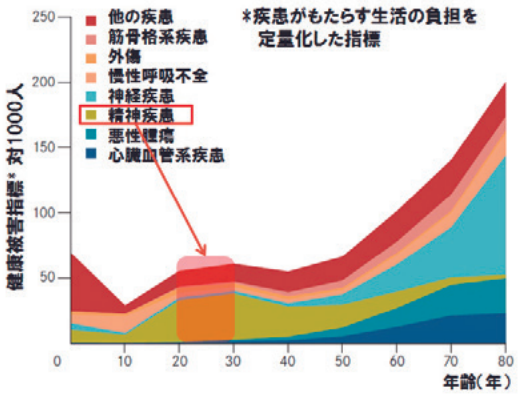
“こころの病”に要注意

皆さんご存知でしょうか。10代後半から20代は精神疾患を発症しやすい年齢であることを。うつ病（躁うつ病）や不安障害（社交不安やパニック障害など）は、健康な社会生活を阻害する大きな原因となります。多くのケースでは修学にも影響し、時には留年を余儀なくされることもこともあります。残念ながら他の身体疾患に比して病状が捉えにくく、見過ごされやすいのが現状です。学生諸君、気になったら相談を。

保健管理センター［文京C］ TEL 0776-27-8513
保健センター［松岡C］ TEL 0776-61-8575

各年齢における健康被害の割合

若年層の最大の健康被害は精神疾患



本冊子の感想を教えてください

広報誌「ふくだいプレス28号」を読んだ皆さんの感想を教えてください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で**5名に「ロルバーンのノート」**を、**5名に福袋**をプレゼントします。

プレゼント

使いやすいA5サイズ！

5名

［応募方法］
QRコードもしくはURLからご応募ください。
応募締め切り：2月17日（金）
http://www.u-fukui.ac.jp/m/

文房具福袋です。

5名

（実物とは異なる場合があります）

みなさまからのご応募、お待ちしています！

ご記入いただいた個人情報は、プレゼントの送付、及びお問い合わせ・ご意見をいただいた際のご連絡に使用させていただきます。